
 学 会 記 事

第1回新潟血液免疫学研究会

日 時 昭和61年1月25日(土)
 会 場 新潟大学医学部有任記念館
 (2階大会議室)

一 般 演 題

1. 抗 ATLA 抗体検出法の検討

一 EIA 法とゼラチン凝集法の比較 —

松村 典子・阿部 静 (新潟大学医学部)
 大原 照子・吉原千代里 (附属病院検査部)
 屋形 稔
 品田 章二 (同 輸血部)

成人 T 細胞白血病 adult T cell leukemia (以下 ATL) はウイルス感染により発病する。しかも日本人に ATL 患者が多いので、血清中の抗 ATLA 抗体の検出は重要である。今回、多数処理を目的として開発された EIA 法とゼラチン凝集法の2種の検査法を試みたので報告する。検索した検体は供血者130例、ATL 患者2例、当院患者77例である。

成績：両検出法において供血者は全例陰性であり、ATL 患者は2例共陽性であった。当院患者で抗核抗体が陽性の35例は凝集法では全例陰性であったが、EIA 法では3例がスクリーニング陽性、確認テスト陰性であった。また、抗核抗体が陰性の25例中24例は両検出法ともに陰性、1例は両法で陽性を示した。この1例は妻子共に抗 ATLA 抗体陰性で、輸血歴のある赤白血病患者であった。

結論：EIA 法とゼラチン凝集法は共にスクリーニングとして有用で、診断には確認試験の実施が不可欠であると考える。

2. 当院における T-cell malignancies の免疫細胞学的、並びに臨床的検討

村川 英三・佐藤 正之 (県立ガンセンター)
 (新潟病院内科)
 内海 治郎・浅見 恵子 (同 小児科)
 橋本 謹也
 桜井 友子 (同
 中検血液検査室)

昭58.5~60.12の間に当院で経験した症例のうち比較

の詳細に検索し得た lymphoid malignancy は61例で、T 19例、B 31例、non T non B 7例、判定不能4例であり、うち nonTnonB 及び T の26例につき検討した。分化段階別に下山らに準じ分類すると、Ia 0例、L-stem 7例、Pre-thy 5例、Pre-thy/Thy 2例、Thy 3例、Periph.T 9例であり、年令別では小児10例、成人16例。性別は男17例、女9例。病型別では ALL 14例、ATL 2例、NHL 10例。小児例は L-stem~Pre-thy のALL が主体であり、成人例は Periph T-NHL が優位を占めた。抗 ATLA 抗体は ATL の2例にのみ陽性であった。細胞形態学的には初診時に ATL の2例、NHL の1例に Pleomorphism が指摘されており、臨床所見は、ALL 症例では、骨関節痛、リンパ節、肝脾腫張が高度の症例が目立つ。NHL については、頭頸部原発がほとんどであり、経過中に紅皮症様皮膚侵潤、白血化が高率に認められた。

3. 特異な表面形質を示す T-CLL 細胞の解析

青木 定夫・斎藤 弘行
 横山 明裕・木村美奈子 (新潟大学)
 大西 昌之・丸山 聡一 (第一内科)
 曾我 謙臣・小池 正晴
 永井 孝一・花野 政晴
 服部 晃・柴田 昭
 品田 章二 (新潟大学輸血部)

目的：全く無症状で慢性に経過している T-CLL 細胞の表面形質の flow cytometry による解析結果を示す。

症例：57歳女性、昭和53年以来1万~2万/cmm の白血球増多を指摘されている。これまでに貧血およびリンパ節腫大や肝脾腫はない。

成績：増加している細胞は、LGL 様の成熟リンパ球であった。ロゼット法による検索では CR1, CR2, FcIgG のいずれも陰性。Spectrum III によるマーカーでは、OKT11, OKT3/Leu4, OKT4/Leu3a, Leu1, Leu7, Leu8, OKM1/Mo1 陽性、Leu9, OKT8/Leu2a, Leu11, anti-IL2R, HLADR 陰性であった。FACS 420 two color analysis では上記の各陽性マーカーが同一の細胞に存在した。

考案：本例で増加している OKT11+OKT3+OKT4+OKT8-Leu7+Leu11-OKM1+FcIgG- という細胞は、これまで特殊な病型として NK-CLL や T_H-CLL と報告されているものとも異なる、きわめてまれな症例と思われる。